

「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

あした
コープ未来の森づくり基金レポート

モリイク

MORI - IKU

森に行こう。
森で育とう。
森を、育てよう。

vol.22
Oct. 2021

編集後記

シマフクロウやヒグマなどはアイヌの人々が位の高い神として古くから崇めていました。それだけに、山や森の象徴として感じられる何か特別なものがあつたのかもしれない。アイヌの人々が崇める動物たちというのは、現在においても北海道を代表する野生動物で、やはり人気があります。

ヒグマやシマフクロウと出会う機会はめったにありません。普通に生活しているなら、本当にそんな動物がいるのか疑いたくなるほどです(ヒグマに関しては連日市街地近くに出てきて騒がせていますが)。ですから僕も指折り数えて足りるほどの出会いなのですが、そのインパクトは絶大、存在感に圧倒されるとはこのことだろうと思われ、それはもう何年経っても忘れられない、深い印象になります。彼らと目があって、じっくりとその時間を味わって、そして次に思ったのが、こんな生き物が北海道の森にいることの素晴らしさと、出会えるこの感動をできるだけ後世に引き継いでいきたいということ。そして、彼らと共にある未来の姿は、森なくしては思い描くことはできません。



<https://www.facebook.com/coop.asumori>

モリイク vol.22
2021年10月発行
発行元/ コープ未来の森づくり基金



この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクと、適切に管理されたFSC®認証林およびその他の管理された供給源からの原材料で作成されています。



コープ未来の森づくり基金は、組合員さんのノーレジ袋へのご協力で支えられています。

モリイイク

* contents *

- *02 コラム 森づくりのトレンド
未来のための市民による森づくり
- *04 特集 シマフクロウの保全から地域のあり方へ
シマフクロウが見守るムラ
- *08 北海道の植物を暮らしの中に
蝦夷和紙工房 紙びより
- *09 もっと樹のことを語ろう
大きな木の小さな物語
- *10 森のキモイ・キレイ特別編
野生動物との距離を考える
- *12 木育essay
削り馬には乗ってみよ
- *13 Fの森の今を伝える
Fの森通信
- *14 コープ未来の森づくり基金報告
森づくり団体交流 など

Starting Column 森づくりのトレンド

あした 未来のための 市民による 森づくり

3年ほど前に、仲間の研究者と一緒に「保持林業」という本を出しました。保持林業とは聞きなれない言葉と思いますが、私たちの「造語」です。木材生産を行いつつ、野生生物のすみかなど生態系に関わる森林の機能も「保持」する林業のやり方ということでこの名前を付けました。これから日本で、林業に生態系保全を取り込んでいくにはどうしたらよいか、問題提起も兼ねて出版しま

した。

実は欧米ではもう30~40年前から林業と生態系保全を両立させる取り組みが進められています。生態系保全の観点から生産の対象から外すところはどこか、伐採するときに樹木をどのように残せばよいのかといったことを科学的に検討し、それぞれの国・地域で、具体的な指針をつくってきました。例えば北欧諸国では、森林の中にある生物多様性保全

上重要なスポットは伐採から外し、伐採対象地では枯れ木を含めて一定数の樹木を残存させることとしています。木材生産のための林業を行うことで生態系保全をあきらめるのではなく、できる限り高いレベルで両者を両立させるための努力を重ねてきているのです。

生態系保全のための森林づくりのもう一つの方向として、失われた生息域の回復

など森林再生の取り組みがあります。行政で取り組まれることが多かったのですが、今回の特集で取り上げられているNPO法人シマフクロウ・エイドなど民間レベルでの取り組みも進み始めています。高度成長期以降、人間の手で大きく劣化させてしまった北海道の豊かな森林を再生することは難しい仕事ですが、シマフクロウを頂点とする生態系全体の回復につながる取り組みと位

置付けられます。

ここまで林業と生態系保全、森林再生を別々に書いてきましたが、森林はつながっており、一つの大きな生態系を構成しています。例えばシマフクロウは生息地としての広大な森林を必要としており、繁殖などを行うコアの生息域となる天然林だけではなくそれを取り巻く林業を行っている人工林まで、まとまりをもって保全を考慮していく必要があります。森林

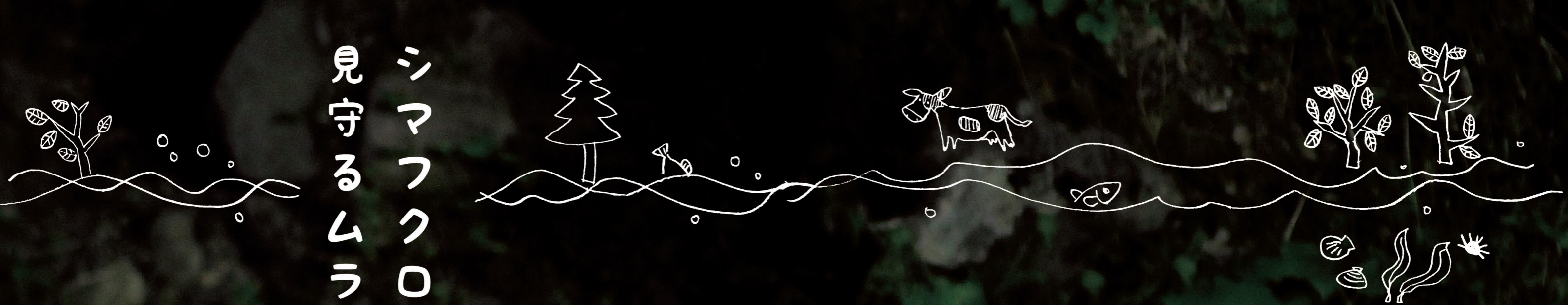
再生の取り組みが十全な成果を上げるためにも、林業の対象となる森林を含めた広域的な生態系保全のビジョンを構想していくこと、保持と再生それぞれの取り組みを広め、つなげていくことが求められています。◆



柿澤 宏昭
(かきざわ ひろあき)

北海道大学
森林政策学研究室 教授
コープ未来の森づくり基金 運営委員長

1959年神奈川県横浜市生まれ。北海道大学大学院農学研究科修士課程修了。現在、北海道大学農学部森林政策学研究室教授。持続的な森林管理を多様な人々の協働で支えるしくみづくりをテーマに研究を行っている。また、欧米、ロシアなどの森林管理政策にも詳しい。主な著作に『エコシステムマネジメント』（築地書館）。2008年より「コープ未来の森づくり基金」運営委員長を務める。



シマフクロウが 見守るムラ

絶滅が心配される
シマフクロウ。
彼らが生きていくためには
豊かな森が必要です。
けどそれは、
実は人間だって同じ。
「保全」から始まる
「地域」のための森づくり。

● 絶滅に近づくシマフクロウ

モリイクを読まれる方なら、絶滅危惧種で世界最大級のフクロウであるシマフクロウという鳥のことを知っている人も多いかもしれません。生息地は北海道とロシアのごく一部。北海道を代表する猛禽で、日本を含めた世界中のバードウォッチャーたちの憧れの的のです。

注目すべきはその数で、北海道には165羽(平成29年度：環境省)しか生息しておらず、ロシアでも減少しており、もっとも絶滅が心配される生き物のひとつです。

大型のフクロウであるシマフクロウが生きていくためには、子育てをするための樹洞がある大きな木と、餌となる魚などの生き物が豊富な、豊かな森が不可欠です。ところが明治の開拓期から続く開発で生息地は激減しました。今では道東の一部で人間による厳重な保護のもと、わずかな数が命を

繋いでいる状態です。

そんなシマフクロウですが、かつては北海道の全域に生息し、アイヌの人々からは「コタンコロカムイ(村を守る神)」と呼ばれて崇められ、大切にされてきました。神の名を冠するだけあって迫力のある巨体と鋭い黄金の眼差し、そして谷間に響き渡る鳴き声は、一度会ったら忘れられないほどの風格です。

一方で、川べりでいつまでも魚が現れるのを待つんびりした狩りの方法や、カエルや鳥など、さまざまな生き物も食べて、渡りをしないで生きる姿などは、餌や住処となる大木もたくさんある、豊かな北海道の森に支えられて生きてきた、少しおっとりした性格を思わせます。それだけに森林の減少や、それにとまなう河川の荒廃の影響は大きかったのでしょう。厳重な保護にもかかわらず、その生息数の回復が遅いのは、生きていける森林環境が現在でも少ないことの

裏返しでもあるのです。

● シマフクロウを守る 森づくりって？

わずかに残された生息地のひとつである根釧地域で、そんなシマフクロウたちが暮らしていける森を広げる活動をしている人たちがいます。「NPO法人シマフクロウ・エイド」はシマフクロウの保護のために、生態調査や森づくりによる生息地の保全、環境教育での普及啓発などを浜中町を中心に活動している団体です。その森づくりは、分断された生息地を、森の回廊(コリドー)をつくってつなげ、自由に行き来できるエリアを広げようというもの。ここで面白いのは、シマフクロウが生きていける環境を目指して森づくりを進めていると、それがいつの間にか地域みんなが生きていくための森づくりになっていったというところ。今回は、そんな不思議な森づくりのお話です。



● 森づくりへの気づき

北海道東部、根室に近い浜中町は酪農と漁業の町です。かつて広大な森林と湿原から供給される栄養は豊かな漁場を形成していましたが、今はその森は姿を消し、代わりに牧草地帯が広がっています。それでも原生に近い自然の残るこの一帯はシマフクロウの貴重な生息地です。

ある年から、台風で町内のトドマツの植林地からの土砂流出が増え、河川に流れ込むようになりました。その影響で川から生きものたちが徐々に減ってしまったのです。

そのことに驚いて、よりよい森づくりのあり方を考えるようになった、と話してくれたのは、NPO法人シマフクロウ・エイドの菅野直子さんです。浜中町のシマフクロウの調査・保護に携わり、森づくりや普及啓発活動をしてきましたが、その年の台風は活動の一つの転換点になったといいます。それは、森づくりはシマフクロウの生息地をつくるだけではない、という可能性。

土砂の流出と河川の汚濁は、地域の漁業にも打撃を与えます。加えて酪農の盛んな浜中町では牛たちのし尿による水質悪化でも漁業は被害を被っていた過去があります。つまり、酪農と漁業と森は川と水でつながっているのです。森づくりは、酪農と漁業を守り、持続的な地域の発展につながる鍵になるかもしれない、その森づくりの行き着く先は、シマフクロウが暮らしていける森づくりと、実は同じなのではないか。というのが菅野さんの考える森づくり。つまり、地域の産業の発展とシマフクロウの保全の両方を森づくりで実現

できるかもしれない、ということ。

● みんなでつくる、地域のための未来の森

そうした活動は地域で多くの人たちとのつながりの中で育まれます。たとえば内水面でアサリなどを採る漁業では土砂の流出による影響は深刻です。森と海の関係は漁業者の中では当然のこととして受け止められていることもあり、よい森を育てるために地元漁協や自治体とともに「浜中町 森里海をつなぐ シマフクロウ地球の森づくり」が行われています。



▲ 馬搬で森づくり。環境への負荷が抑えられる。いろいろな人と技術が集まって多様な森づくり。

もうひとつは、地元酪農家と林業家が一緒になって立ち上げた森づくりプロジェクトの「WAKKA (ワッカ)」。



WAKKAプロジェクトでは「生態学的混播・混植法」で牧草地の河畔林の再生を目指す。

かつて広大な森林地帯だった浜中の地域は今では牧草地に変わりました。浜中の乳製品といえば、大手高級アイスクリームの原料に使われるなど、そのブランドは広く評価されています。しかし、SDGsが叫ばれるこれからの時代に自然との共生の考え方はこの町の酪農業にも欠かせないものとなっていきます。そう語るの、WAKKAプロジェクトでシマフクロウ・エイドとともに森づくりを進めるGrateful Farmの松岡慶太さん。有機酪農を営む傍で牧草地の一部で森づくりを続けてきました。環境に配慮した酪農は、どうしても乳量が減ってしまうので経営が難しい。森づくりは牧草地の質も高めるし、環境への配慮は付加価値になる、とその意義を話します。ヨーロッパなどでは環境対策をしない企業は評価が低く融資も受けにくい風潮が生まれています。今後のことを考えれば、地域全体で環境保全への取り組みを考えていく必要がある。だけど現役世代の酪農家は、逆にもっと森を伐って牧場を広げたいと思う人も多いのだとか。そうした人を取り込んで活動を広げるのもこれからの課題とのこと。そのために取り組んでいることの一つが「教育」です。

● 森づくりが根付くためには

これらの活動が自分たちの世代で終わってしまえば意味がありません。もともと環境教育に従事していたこともあり、伝えることの重要性を認識している菅野さんは、出前授業やイベントを通じて地域の子もたちに森の楽しさ・大切さも広めていて、道外の環境NPOと協働して「シマフクロウも

人も喜ぶ地域づくり学習」を展開し、子どもたちとの森づくりも行っています。

こうした教育活動を通じて、世代を超えて森づくりへの理解が「根付くこと」で、地域の産業も、シマフクロウが暮らせる自然環境も持続可能になるのだといいます。

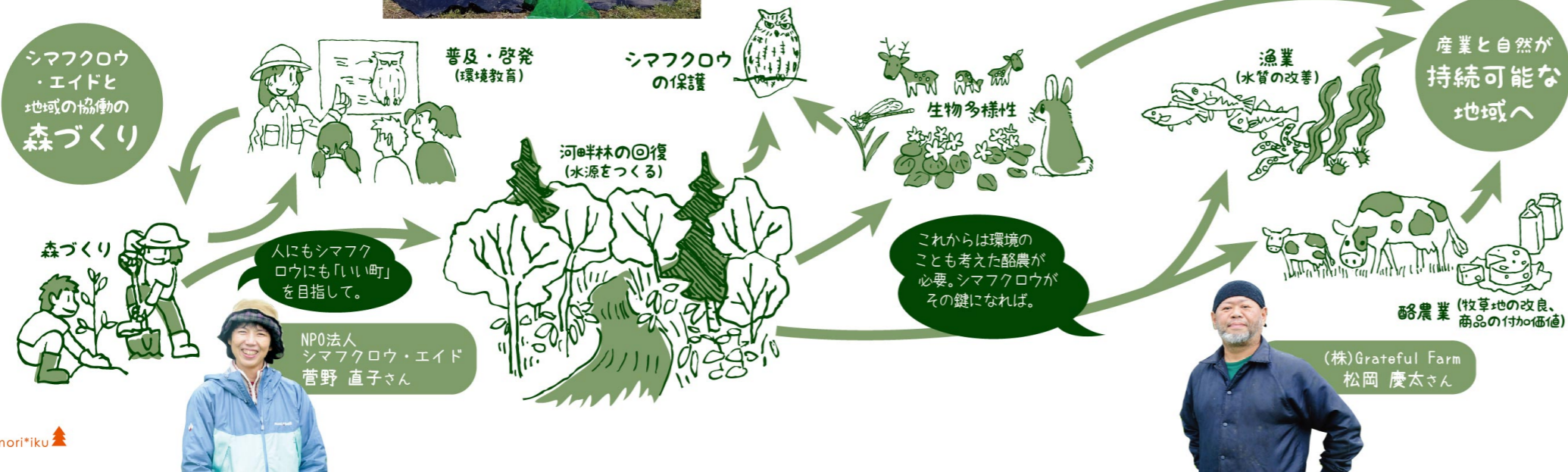


▲ 地元の子もたちに伝える、シマフクロウの住める森の大切さ。森づくりへの理解が地域に根付くように。

希少な野生動物を保全しようと思う時、普通はその動物のことを第一に考えてしまい、ともすれば他のことはどうでもいい、となってしまうこともあるかもしれません。

シマフクロウという存在、彼らが生きる環境を大切にしたいという思いから始まった菅野さんの森づくりは、さまざまな出来事や出会いから、人の暮らしもシマフクロウも大切にしたい、シマフクロウを含めた地域をまるごと持続可能にする試みに膨らんでいます。自分たちにもリターンが返ってくるほどのスケールでの森づくりが根付くこと。その森づくりが子どもたちを通して次の世代に伝わっていくこと。そんな願いを聞いていると、共存のために人も含まれた「環境」を意識することが大切だと感じます。これからの環境保全は、こうした全体を視野に入れた「あり方」がひとつの流れになっていくのかもしれない。

シマフクロウにとっては牧草地に網の目のように流れる小さな流れが重要な餌場になる。こうした川に覆い被さるように茂る河畔林を育てるのが目標。



シマフクロウが暮らせる豊かな地域であること。その価値を、学び、つくる。それは、人も自然も大切にしたい。持続可能な地域づくりでもありません。そんな「ムラ」になったら、きっとそれは、コタンコロカムイが静かに見守ってくれている証に違いありません。

蝦夷和紙工房 紙びより

facebook.com/kamibiyori

荒くれた表面にまばらに漉きこまれているのは、あからさまに樹木の樹皮。手触りもがさつとしていて、普通に想像する和紙のイメージとちょっと違う。いい換えれば、立木をそのまま何かの魔法で紙に変えてしまったような、そんな雰囲気なのです。だから、荒れていてもごわついても、感じるのは森を歩いていてふと樹に触れた時のような、生命のやさしい手触り。

札幌市内で「蝦夷和紙工房 紙びより」を開いて和紙づくりをしているのは東野 早奈絵さん。小さい頃からものづくりが好きで、様々な素材で作品作りをしてきた中、人の暮らしの中にあって子どもの頃から好きだった紙という素材に行き着いたのだそうです。福井県の越前和紙の工房で修行し、一時はそこに骨をうずめる覚悟で紙漉きをしていたのですが、家族の病気を契機にさんざん悩んだ末に実家のある札幌に移り、より創作的な活動を目指して自身の工房「紙びより」を開いたのです。

和紙といえば日本の伝統工芸。その歴史は1500年におよび、産地もさまざま。でも北海道には伝統的に受け継がれた和紙の産地はありません。いわば和紙と縁遠い土地柄ともいえます。そんな中、出身地でもある北海道でもっと和紙の魅力を伝えられないかと生み出したのが「蝦夷和紙」。北海道の植物を使って、より北海道の人に身近に感じてもらえる紙にしたいと、北海道に自生する様々な植物を素材に和紙づくりに挑むプロジェクトです。集めた素材を大変な手間をかけて漉き、作品をつくる傍らで一般の方を対象に紙を漉くワークショップも開催しています。そんな「蝦夷和紙」ですが、当初、仕上がりは自分でイメージしていた、筆記などに使う「和紙」とはかけはなれたものだったといいます。ところが一緒に作った人から「これは面白い紙ができたね」という感想が出てきたことから、紙の持つ別の魅力や使い方を思いついたそうです。そうして、従来の紙と違う、その風合いで生活をアーティストックに彩る「蝦夷和紙」というコンセプトが生まれたのです。

東野さんは、蝦夷和紙を「大切に使うてもらって、最後は土に還っていくといい」と話します。なるべく環境に負担をかけずに、少し暮らしを贅沢にするものを作る。自然の営みをなるべく邪魔しないものづくりを心がけているのだそう。「蝦夷和紙」づくりで北海道の様々な植物を素材に使うにつけ、それぞれの素材の表情や、見たこともない紙ができる面白さなど、植物の豊かさを感じるといいます。その植物たちが生きるこの地球環境も、人間が快適に生きるための行き過ぎた開発によって悲鳴を上げているよう。暮らしの中に自然との調和を取り入れることでそうしたことにも思いを向けてほしい。

生活に和紙がとけこむような、自然と調和の取れた暮らし。プラマイゼロで幸せを感じられる暮らし…。そういった東野さんが提案する豊かさは、人と自然の関係をもっと近づけてくれるのではないかと。生命の匂いが沸き立つような「蝦夷和紙」の手触りは、そんなことをそっと教えてくれているのかもしれない。



北海道の植物の風合いをそのまま閉じ込めた「蝦夷和紙」の作品たち(上・中)。筆記用具としての紙だけではなく、アーティストックに和紙を暮らしの中で活かし、自然との調和のとれた空間を提案する東野 早奈絵さん(下)。背景は代表作の「ゆきふみ」。「蝦夷和紙」とともに「札幌スタイル」の認証製品となっている。

写真提供：蝦夷和紙工房 紙びより

大きな木の 小さな物語

⑰ ハシドイ

ハシドイは10~12mほどになる落葉広葉樹です。北海道では道北の中川町付近が北限といわれています。ただ、これよりも北の礼文島にはあるので、振興局単位で分布を表現すると宗谷地方にはあり、ということになります。全道を見渡すと檜山地方だけには分布しません。

どこにでもありそうなのですが、ハシドイはあまり聞き慣れない、見慣れない木なのではないでしょうか。ライラックの仲間、というわかりやすいかもしれません。ライラックの和名はムラサキハシドイ。原産地であるアフガニスタン・ペルシア地方からヨーロッパ・アメリカを経由して明治中頃に札幌に持ち込まれ、その後札幌市内のあちこちに植栽されました。札幌市民にはとてもなじみ深く、1960(昭和35)年に市民の投票によって「さっぽろの木」に制定されています。

ライラックは5月中下旬に咲きますが、ハシドイはこれよりも1ヶ月以上も遅く、7月初旬に開花します。ハシドイの花はライラックよりも香るそうですが、あいにくそれに気がついたことがありません。札幌市内では南区石山の旧国道の街路樹として植栽されています。樹高は高くありませんが、満開のころのシーンは見応えがあります。鼻孔を全開にするときつといい香りが漂ってくるでしょう。

秋には蒴果と呼ばれる果実が実ります。種子には翼あり、軽くはなさそうですが、風で子孫を増やすタイプです。

ハシドイの語源はよくわかっていません。燃やすとパチパチ跳ねるので「走る木」がその語源ではないかという推察もあります。アイヌ語でも「プシニ(跳ねる木)」と呼ぶ地方があり、これも燃やしたときにパチパチ跳ねたさまから名付けられたようです。まるでひっきりなしにしゃべっているように見えるので「イタク・ルイ・マツ(おしゃべり奥さん)」なんて名で呼ぶ地方も…。日本語もアイヌ語も「パチパチ跳ねる」がキーワードなのですね。



未熟な果実



果実



果実と種子



花



花

つぼみ



text/images 孫田 敏

‘54年山形県長井市生まれ。’77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。’90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士(建設部門；建設環境)。著書：アトリウムと植生(積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計；絵内正道編著)、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方(水辺域管理—その理論・技術と実践—；砂防学会編)、森林管理と市民参加(北のランドスケープ 保全と創造；浅川昭一郎編著)

WEBサイト「Scan Botanica」<http://scanbotanica00.sblo.jp>



森に入ると出会う生きもの。
森から街へ出てくる生きもの。
野生動物と人、近づくことで起こることを考えてみよう。



円山公園の遊歩道にある立て看板。大切なことが書いてあるよ。

「エサやりNO!」、 どうしてダメなの?

ボクらの街からすぐ近く、森の散歩道にこんな看板があったよ。
ここには、生きものが好きな人たちがたくさん集まる。
エサをあげる人がいるので、エゾリスもシマリスもヤマガラも
すぐ近くまで寄ってくるんだ。とってもかわいい。
でも看板には「餌付けはダメ!」って書いてある。
エサをあげると、とても喜んでくれるのに、それは悪いことなの?



何が悪いの?
その生きものは野生動物。
ペットじゃないよ。

野生動物とは、自然豊かな環境で生活し、人間を頼らなくてもいい動物のことです。彼らは北海道の自然の恵みの中で、長い長い年月をかけて自分にあった食生活、気候や生態系にあった暮らし方を身につけています。餌付けは必要ありません。



動物同士が集まるので感染症など、病気がうつる可能性が高くなります。また、大型の鳥やキツネ、犬猫などにねらわれやすくなります。

人がまいた木の実を求めてヒグマがやってくるかも? エサがほしくて、人に接近したり、攻撃的になることも考えられます。

人があげるエサは高カロリー・高塩分。健康を害してしまいます。



かわいいけれど、これ、自然なこと?

しかもこんな悪いことが起きるかも!



交通事故や建物への衝突など人間社会の危険にまきこまれることも...

鳥が渡りをしなくなる、冬眠しなくなるなど、エサがあると暮らし方が変わってしまいます。すると、気候の変化に耐えられなかったり、他の動物にねらわれたり、新しい問題が起こります。

タンチョウへのエサやりがOKな理由は?

かつてタンチョウは絶滅のおそれがありました。絶滅危惧種*を保護するため、法律を守りながら計画的に給餌をすることがあります。いつ、どこで、どのくらいエサをあげるか、研究者や保護活動をしているみんなで調査して決めています。

*絶滅危惧種とは、生息している数がものすごく減ってしまい、このままでは地球上から姿を消すおそれのある野生動物のこと。



人からエサをもらうことをおぼえてしまうと、自分で食べ物を手に入れたり、安全に暮らすための野生の能力が失われます。

もし...突然エサをくれる人がいなくなったらどうするの?



野生動物に近づくとき人にもキケンがあるの?



かまれたりひっかかれたりしたらバイ菌が入るかも?

エサをまくだけでなく、手から直接あげようとする人も...



野生動物はさまざまな病気や寄生虫をもっています。その中に人間に感染する病気もあります。たとえば、

キタキツネ
キツネや犬が感染する、エキノコックスという寄生虫があります。このタマゴが人の体に入ると、重い病気を引き起こし、死ぬこともあります。



マダニ

哺乳類の血を吸う虫で、動物について移動することもあります。刺されるとライム病、ダニ媒介性脳炎などの病気になることがあります。

新型コロナなどの感染症も人が野生動物にどンドン近づいたことから感染したとも考えられています。鳥インフルエンザなど、家畜やペットにうつる病気もあります。

札幌市の円山公園で調べてみたら...



ヒマワリの種。こんな「えさ」が年間100kg以上も森にまかれています?

- ヒマワリの種、本州や海外産のクルミなど、北海道の森にはないものがまかれています。
- エサをもらえる場所には、エゾリス、シマリス、野鳥(カラス類)などが集まり、人によってくる。他の森では見られない行動です!
- 管理者が注意をしたり、看板を立てているけど、餌付けは減っていません。
- 一部の人の手で、森の姿、生態系のかたちが変わってきています。

一部分だけ見てはいけません、いのちのサイクル

エサがまかれている森では、餌付けに慣れた動物だけが生き残って増えていきます。すると...その動物が好んで食べる虫や植物だけが減る、他の動物の食料がなくなると、その動物が花粉やタネを運んでいた植物が消える、と見えないところで大きな影響が出ます。自然は時には厳しく、大きな災害が起きたり、エサが少ない年があって飢えて死ぬことも。でも、厳しさも含めた何十年何百年という長い時の中で、命のバランスが取れているのです。



「かわいい! かわいそう! 助けてあげたい!」と思う気持ちは大切だけど、それは人間側の一方的な見方、勝手な思い込みかもしれません。野生の動物を自分のペットにするような、自分勝手な気持ちはないかな?

法律違反になることも!!

北海道には、生物多様性を守るための「条例」があり、農業や人への被害を避けるため、野生動物への餌付けを禁止することができます。また、ヒグマへの餌付けは禁止されています。今年改正された自然公園法で、国立公園での野生動物への餌付けが禁止されることになりました。また、札幌市の円山や藻岩山は天然記念物なので、現状の姿を変えてしまう行為は禁止されています。自然を守る上で大事なものは、見た目の美しさや豊かさを守るのではなく、生態系の仕組みやバランスを変えないで、そのままのかたちで守っていくことです。

北海道生物の多様性の保全等に関する条例が掲載されています
北海道の生物多様性ポータルサイト
www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/tayousei/tayousei_top.html

森を散策中の動物や野鳥との出会いは、大きな喜びを人間に与えてくれます。動物の美しい姿とその行動は見飽きることがなく、生態系の仕組みを理解する様々な学びを与えてくれます。しかし、その行動が人の餌付けにより変化したものだとしたらどうでしょうか。野生動物は人間のペットではありません。人間の都合の良いようには行動してくれないからこそ、その出会いに私たちは喜びを感じるのではないのでしょうか。おまけに餌付けされることにより、その動物そのものや生態系に変化を及ぼすことはあってはならないことです。森の主役は人間ではなく、生物です。適切な距離を保ち、影響の少ない方法で、森を楽しむことが持続的な保全につながります。

お話を聞いた人

愛甲 哲也 さん

北海道大学大学院農学研究院 准教授
鹿児島県生まれ。博士(農学)。北海道大学農学部、大学院環境科学研究所を卒業。北海道大学野鳥研究会でバードウォッチングと北海道の自然ふれ、国立公園・都市公園の管理や人と自然の関係について研究しています。



削り馬にはのってみよ

削り馬をご存知だろうか。

木馬のような形をした道具だが、足は地面をつかんで安定している。使う時は背の部分にまたがって、両足は頭の部分にから伸びている腕を踏みしめる。その頭の部分に、加工する木をはさんで固定する仕組みになっている。両手が自由になるので、細工が容易になる。

英語でもそのまま『シェービングホース』という。コマーシャルで再ブームになっている『ハイジ』のアルムおんじは、削り馬でお椀や椅子を作っていた。また、アメリカの絵本作家で有名なターシャ・テューダーは、マルボロの郊外につくった『コーギー・コテージ』でスローライフをおくっていたことで有名だが、すっかりおばあさんになった彼女が勇ましい姿で、削り馬にまたがっている写真を見たことがある。何を作っていたのだろう。

削り馬で作るものはいろいろある。ネットで検索すると木のスプーンが多く目につく。私がイメージするのはまず、通称「削り馬のツリー」といわれるものだ。直径5、6センチからもう少し太い木の幹、あるいは枝のなるべく真っ直ぐで節のないものを選び、切ってからおよそ十日から二週間ほどおく。それを削り馬にはさんでセンという刃物で削いで螺旋状に残し、枝を張った樹形に仕上げていく。ほかには五角形に削って小口に切り落とし、色を塗ったり窓を描いたりして小さな家に見立てるものや、幹の先を削って尖らせたものに少し大きい幹片に穴を開けたものを刺して作る「トンカチ」などは小さな子どもやビギナーにも簡単にでき、ワークショップの人気者だ。ところでそれらを作るとき使う材は、切ってから日にちが経っていないものがふさわしい。それはなぜか。

『グリーンウッドワーク』は、私たちが木育を行う上で最も重要とする事柄の一つになっている。森から切り出したそのままの未乾燥の材を利用して木工品を製作する、というものだ。

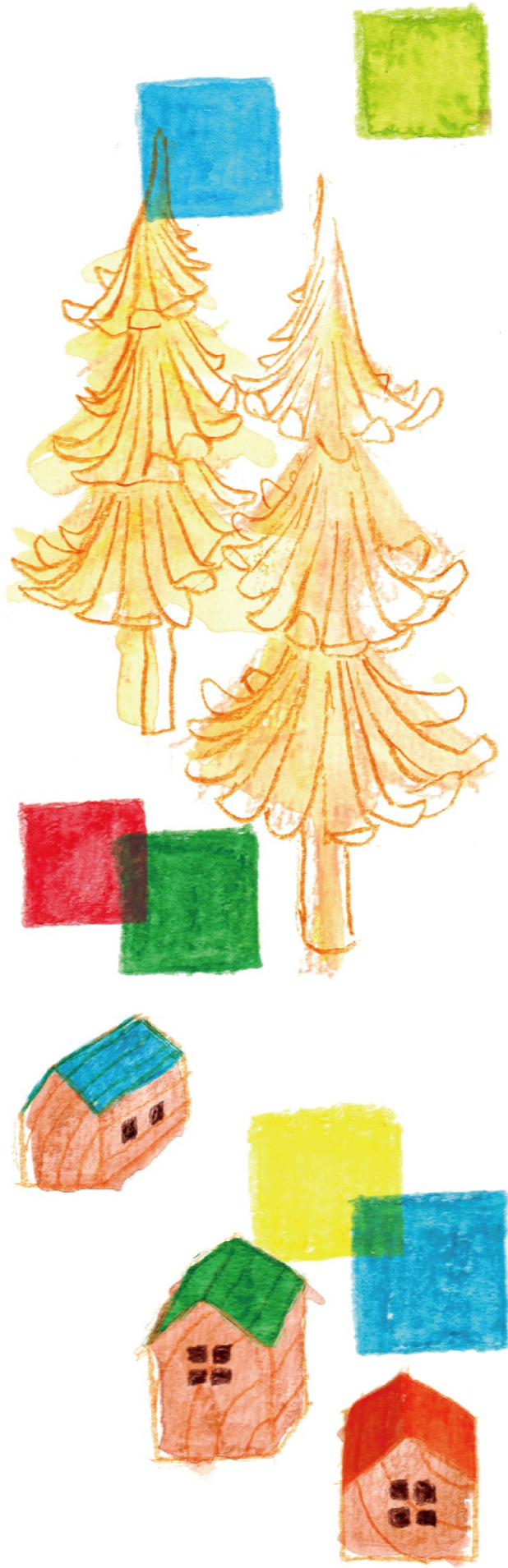
一般的な木製品のイメージは硬くて乾いていて、匂いも強い芳香を放つものは特定の樹種に限られる。では、生木(グリーンウッド)はどうだろう。

初めて削り馬で生木を扱った人がまず驚くのは、その柔らかさだ。刃物を当てて引く感触は木というよりはダイコンかキュウリといった野菜をピーラーで削るあの感じ。それから直ぐに樹液が強く香り立ってくる。ヤナギの、シラカバの、サクラの、エンジュの、一つひとつの個性的な匂いに圧倒される。樹液が噴き出しているのは、目でも確かめられる。水晶の粒のように材の表面にキラキラと光って見えることさえある。好奇心を刺激されて思わずその表面に触れてみる。そしてその思いがけない冷たさにぎょっとする。

子ども達は(おともだが)、そういった新鮮な体験に夢中になる。なにかを作る。あるいは目的を持たず、ゴールさえ知らずにただひたすら感覚を満たすために削り続ける子どももいる。そういうとき私は、「ああ、いまあの子は人生のなかで、大切なひと時をもったのだな」と思う。ある時友人が、ワークショップでいつまでも削り馬をやり続けている子がいたらどうするかと問うたことがある。夫は笑って、「そういう時はその子がそれで終わり、と思うまで続けさせるよ」と答えた。たとえ順番を待っている子がいたとしても、その子は待つ、自分の番が来たら思う存分やればよい。ものを作ったり、なにかをつかんだりするための時間やたどる道は、一人ひとり違うのだから。

もし、あなたが今、削り馬ってなに? と思っているなら、ぜひ、機会を見つけてまたがってみてほしい。

古人曰く、「馬にはのってみよ、人にはそうてみよ」である。🌲



text / 齊藤 香里

介護事業所での管理職などを経て、現在は夫とともに「よいい木育倶楽部」を運営し、木育の活動を行っている。介護福祉士、ケアマネジャー、木育マイスター。

Fの森から



夏のFの森での作業

森づくりは弱者を思いやる気持ちで

新型コロナウイルスが蔓延する中、森の手入れをしながら「Fの森の森づくりは国づくりに似ている」と感じているこの頃です。

Fの森では森づくりワークショップで広葉樹を中心とした約20種類の樹種が毎年提案され、2013年から7年間で合計7000本ほどの苗木を組合員さんとともに植えてきました。しかし多様な樹種は成長の度合いが異なるなどの要因で刈払機での草刈りが難しく、夏場の手入れが不十分だったりして生育状況が芳しくないエリアが多くなってしまいました。

そのため実際の苗木の状態を確認し今後の効果的な「保育」方法の検討を兼ねる森の手入れを行った結果、樹種ごとの成長の違いや動物の食害と積雪の影響などに加えて、ヨモギなどの野草が苗木への日照を遮るとともに冬を越す

と倒れた野草の茎などが苗木を押さえつけ水平方向への成長を余儀なくさせていることや、シラカンパの天然更新が苗木に影響を与えていることがわかりました。

これを踏まえ、苗木が野草の背丈を超える程度になるまで、春に苗木の「目印立て」(4尺の女竹にピンクのテープを縛る)、野草の草丈がある程度伸びた時に行う「つぼ刈り」(手鎌使用)、夏場の野草の成長期に刈払機で「下刈り」を行う流れが効果的な方法と考えています。

毎年丹精込めて植えられた苗木も、成長が緩やかだったり周囲の野草より弱い樹種はなかなか育たず強いものだけが優位に立つという状況は、最近の社会の様子を映しているかのようです。「Fの森」では、第一に弱いものへの「思いやり」を持つことが描いた森にするための大切な方法

再開する森づくりのための、今は見守る時間

2012年より始めた「Fの森ワークショップ」。当初よりデザインから植栽樹種までを専門家(といってもほぼ初めてのことなのでみんな手探りでしたが…)として協力をしつつ市民有志が集い、みんなで森を歩き、考え、話し合い、植樹祭を行ない、森づくりを進めてきました。実際にワークショップといっても限られた時間の中なので、やりたい事、試してみたいことはたくさんあっても、なかなか数十年先を夢見て描いていた森に向けての効果的で実践的なことができないまま現在に至っています。それでも、大勢の目で、季節を変えての森歩きをしつつのワークショップでしたので、毎回違った姿を見せてくれ

る森、自然の楽しさや厳しさなど、それぞれに実感してもらっていたように感じています。植樹や育樹に参加いただいた皆さんにもその過程がほんの少しでも伝わっていると良いなと思っていますところす。

2020年、新型コロナウイルスの影響もあってワークショップは休止となっていますが、植樹した木々は日々成長していて、森の時間は止まることはありません。しっかりと着実に成長しているもの、競争に負け気味で元気を失くしているもの、環境の変化に耐えられなかったものなど、これまで見てきたようなことが成長とともに繰り返されています。

また、この先まだ数年は復元してくる草花や自然に飛来して定着する樹々が多くあって、それらと共存していくためにも、植えた木々を見



苗木の提供や森づくり全般を担当

雪印種苗(株) 木村 浩二

川口さん 木村さんの

コロナの影響もあってなかなか森づくりの機会もない今日この頃。Fの森の管理人、川口さんと木村さんがFの森の今の様子をお伝えします。

下 の 森 通信



手鎌で坪刈り。地道な作業

なのだと考えると、この森づくりは優しさある国づくりにも通じているとともに、人にとって大切なものを学べる場でもあるのだらうと思っています。

今年の森の手入れは地元当別町の森づくり団体「シラカンパ」さんと「NPO法人ezorock」さんに協力頂きましたが、Fの森が立ち立てできるようにももう少し皆さんの手助けをお願いしたいと思っています。

森づくり全般をサポート

NPO法人 北海道市民環境ネットワーク(きたネット)

川口 弘高



守っていく活動(目印付けや草刈りなど)は必須になります。ワークショップなどで、一人でも多く参加してもらいたいところでもあります。再開されるワークショップなどの森づくりを迎える準備として木々の成長を見守る活動に注力すべき時期なのかもしれません。

2022年で活動開始よりちょうど10年目。保育活動もそうですが、まずはすっかり見違えた「Fの森」の姿を感じられるゆったりとした時間を皆さんと共有したいと思っています。



7月のモリイケテラス

Event Report

組合員さんの、新しい森づくりへ。 森づくり団体交流



コープさっぽろではあすもりを中心に、各地区委員会でも全道で森づくりが行われていて、自治体と協定を結んでの植樹祭は10年以上にわたって続いてきました。しかし、多くの自治体との森づくり協定が終了するタイミングを迎え、組合員さんたちのための森づくりは次の段階へ進む必要が出てきました。

北海道にはさまざまな森づくり団体があって、それぞれ独自の技術や考え方で多様な森づくりが広がっていて、あすもりも助成という形で支援しています。そこで、これからはそうした森づくり団体とコラボレーションすることで、組合員さん

植樹だけじゃない、
多様で豊かな森づくりを
組合員さんたちと
楽しみたい。

たちにも一段深く、そして多様な森づくりに関わる機会になるのではないかと考えました。そうして「森づくり団体交流」が始まります。

とはいえ昨年から続くコロナ禍の影響で、こうした大人数が参加するようなイベントは簡単には開催できません。そこで、2021年度にはどんな団体とどんな活動ができそうなのかを地区委員のメンバーが中心になってお試してみよう、ということになりました。

ここではそんなお試し活動をご紹介します。早くこんな活動が組合員さんみんなのできるようになるといいですね。

旭川地区

とことん、森を楽しむ一日!

with NPO法人もりねっと北海道

6月30日、集まった地区委員と職員が向かったのは旭川のはずれにある天然林。ここでは旭川の森づくり団体「もりねっと」の皆さんが手入れを続けていて、森の中を歩けるトレイルやたき火のできる広場、休める小屋などが整備されています。案内してくれたのは、「Fの森」の森づくりでも講師を務める山本牧さん。この森の持ち主でもあり、管理人でもあります。

山本さんが森を歩きながら話してくれることには、森ではそれぞれの木々がそれぞれの生態を持っていて、得意不得意がありながら自分の長所を生かして生存競争を繰り返しています。たとえばシラカンバはまだ荒地の頃に一番早く芽を出して大きくなる、その分日当たりが必要で寿命は短め。ミズナ

らなどはシラカンバが大きくなってから生えてくる。日当たりが悪くても育ち、長寿、などなど。

こうした木々の特徴や森の様子を見ながら、例えば細く弱い木は間引いたり、次に育つ木のために森に光を入れるように伐採する木を考えたりと、どんな森を育てていくのかを考えながら手入れを進めることなどを話してくれました。

そして実際に間伐作業を体験。樹齢50年を超えるシラカンバを交代しながらノコギリ一本で伐り倒し、その初めての迫力にみなさん圧倒されました。

そのあとはたき火ゾーンで火を囲み、マシュマロや野菜などを串に刺して焼いたり、山本さんから森の話を聞いたり薪割りやチェーンソーの体験をしたり、森の中で楽しい時間を過ごしてみました。



森を楽しむ、
ということ、
今年は色々やっ
てみたいと思っています。

牛久保 真澄さん

室蘭地区

生き物とのふれあい、思う存分!

with NPO法人ビオトープ・イタンキ

6月23日、少し肌寒いけど室蘭・イタンキにあるビオトープに集まった子どもたちは元気いっぱい。水に入って大きなガムシやたくさんのモノアラガイ、小さなトゲウオのトミヨなどを捕まえては目を輝かせていました。

NPO法人ビオトープ・イタンキが管理している小さなビオトープは子どもたちが生き物と触れ合い、遊べる場を目指して作られた「獲物のあるビオトープ」。思う存分自然と遊べる場を子どもたちに、という思いから、荒れ果てた公園だった海岸の一

部を室蘭市と交渉しながら立派なビオトープに仕上げました。今回は室蘭市立八丁平小学校の3年生が環境学習に訪れ、室蘭地区委員会も参加したのでした。

このほかにも、ビオトープ・イタンキではホテルの観察会が行われており、毎年室蘭地区委員会も参加していて、今年も20名が参加し、3匹のホテルを見つけることができたとか。こうした団体との交流を通じて新しい森づくりの魅力が組合員のみならずにも広がったらいいな、と思います。



今の子は
なかなか外で
遊ばないので
こういう場所があると
いいですね!



中村 桂子さん

久保 由美子さん

Report

コープ未来の森づくり基金 2020年度 活動報告・会計報告

今年度はコロナ禍のため一般参加の植樹祭は中止し、職員・エリア委員による植樹を一部実施しました。総植樹は3,680本(北海道ぎょれんによる植樹も含む)、全道7カ所の「コープの森」にて、2,080本を植樹しました。

道民の森の植樹地「Fの森」での、「森づくりワークショップ」は感染防止の観点から中止しました。「Fの森」での森づくり活動を継続するため、2021年度に関連NPOと協力して保育活動を行う計画とワークショップ参加者が現地の状況を確認する企画の計画を立てました。円山動物園とのコラボ企画であるどんぐりプロジェクトも中止しました。これまで子どもたちに伝えてきた環境教育の内容は、

2021年度に紙芝居動画としてまとめる計画を立てました。

森づくり団体への助成として、高額助成3団体、小額助成16団体に対し410万円を支援しました。また北海道ぎょれんさんが進める「魚付林植樹活動」に対し570,866円(税別)(植樹面積0.20ha、苗木本数1,600本分)を助成しました。

第11回北海道の森づくり交流会では、全道の会場をテレビ会議中継でつなぎ、21年度の高額助成団体より活動発表をいただきました。

基金レポート「モリイク」は20・21号を発行し、森づくりの交流サイト「あすもりFacebook」も「いいね!」が1,300件を超え、順調に推移しています。

2020年度収支一覧

(単位:千円)

	20年度予算	20年度決算	内容
レジ袋積立	22,700	22,385	レジ袋削減の協力積立金
協賛金ほか	4,200	2,676	エコ協賛金、企画協賛金、書き損じハガキ収益
収入計	26,900	25,061	
植樹森づくり活動	16,390	7,616	植樹・育樹活動、つながる森づくり企画
助成金支援	7,000	4,679	森づくり団体への助成
広報・調査・運営費	6,010	6,091	広報誌、調査研究、運営費
支出計	29,400	18,386	

Present アンケート&プレゼント

「モリイクvol.22」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

- Q1 モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。
- Q2 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか?
右からそれぞれお選び下さい。
- Q3 森づくりの活動に参加したことがありますか? (はい・いいえ)
- Q4 コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。
- Q5 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

巻頭コラム(P2)
シマフクロウが見守るムラ(P3~7)
木づかい(P8) 大きな木の小さな物語(P9)
森のキモイ!キレイ? 特別編(P10,11)
木育エッセイ(P12) Fの森通信(P13)
あすもりレポート(P14~15)



PRESENT!
アンケートに回答いただいた方から抽選で2名様に、「蝦夷和紙工房 紙びより」から蝦夷和紙のカード(2枚セット・封筒つき)をプレゼントします。森の雰囲気をお手紙に込めてどうぞ。

応募方法
アンケートの回答を記入の上、住所・氏名・年齢・連絡先を明記の上、はがき、FAX、メールにてお送り下さい。プレゼントの当選は発送をもって替えさせていただきます。
応募締切 11/1(月) 当日消印有効

コープさっぽろ基金事務局
〒063-8501 札幌市西区発寒11条5丁目10番1号
FAX: 011-671-7575
メール: csapmori@sapporo.coop



こちらからもメールできます